

で話し聲が聞える。

風が吹くので、雨戸を立て、一枚だけ障子にしてあるのだが、家の中は薄暗い。

雪の足跡をさぐりにやうやく辿りつき。

女が表へ出て、

「居れます

寒いからお這入んなさい」と頻りに言つてゐる。

野田と芝がやつて来てゐるのだ。

僕は物凄いい目で、障子の破れから覗く彼等をネメ付けて、尙も念佛三昧をつとけた。

「お友達が迎ひに來られましたよ」と女が言ふ。

「俺は太陽にとどくまで、此の妙音を響かせねばならない」

聽て彼等は歸つたらしいので、僕はぐつたり疲れて、腹が減つてゐる事に氣が付いて、めしを

請求した。

女は外へ水を扱みに出る。